文化　國語への愛情[[1]](#footnote-1)

香山光郎

私は小學校には行つたことがない。中學から東京でを受けた。私の國語の力は中學と文學書から得たもので、小學を受けてゐないから大變不完全なものである。

私は最近においてび國をめてゐる。それは全な國を使ひたいといふ野心からだ。

私はラヂオを力めて聽取してゐる。特に送やや、などを注意して聽いてゐる。これらの人は、いづれもことばの人であり、且つ生活のあらゆるのことばが、これらのプロでかれるからだ。大ためになると思ふ。

朝人たる私として、一番るのは、家庭内の言葉をく會にまれてゐないことだ。そのために私の國は『本のことば』の域を出ない。生きた、實にられてゐる國になり難い。私はこの缺點をラジオや電車内のきえで補はうと努力してゐる。

書く、話すことばから、朝人いところを全然なくすることは、非に難しい。彙の不足、ことばの意の含の足りないこと、發と、そして最後にへ方、表現の仕方の種々なる誤、これらを全してめて國がるといひ得る。に國で學を書くためには、このに日本そのものを十分に正にし、じ、それに生きなければならない。『うろおぼえ』を『でたらめ』に使つたのではそれは人のことばに過ぎない。

今日の國學校の童たちは正確な國語を學んでいる。私は子供たちのおさらひを手ひながらにへられることがく、時々私のことばの知の不正さに赤することさへある。

しかし、難しいとはいつても不可能ではない。私は必らずや全な國を使ふ日が、私に來ることを信じてゐる。まだ私は齢五十にしかなつてゐないのだから。（『京城日報』1942年11月26日）

1. 『京城日報』1942年11月26日朝刊2面 [↑](#footnote-ref-1)